The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代ニュージーランド演劇をめぐって : 南太平洋移民文化と先住民文化のはざまで
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2009, 2008, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代ニュージーランド演劇をめぐって

——南太平洋移民文化と先住民文化のはざまで——

小杉　世

1．現代ニュージーランド演劇における言語とエスニシティー

ここでは、ニュージーランド人作家による戯曲だけでなく、ニュージーランド在住のサモア人作家によるニュージーランドを舞台にした南太平洋移民に関する戯曲で、ニュージーランドで上演されているものを含め、広く「ニュージーランド演劇」とよぶことにする。ニュージーランドは、毎日おびただしい数の芝居があまたの劇場で同時に上演されるロンドンのような劇場文化を謳歌できる場ではないが、地味ながらも若手のマオリ劇作家や南太平洋諸国出身の劇作家たちが新しい作品を書きつつある。単本として出版されないマイナーな戯曲も含めて、上演の翌年には Playmarket とよばれる出版社から製本されない仮綴の草稿として、スクリプトが出版されるので、正式な出版物としてではなくともサーキュレイトする可能性は、むしろ長編小説などよりも開かれている。

マオリ作家としては、小説で有名な第一世代の作家ウィティ・イヒマエラ（Witi Ihimaera）が、ギズボーン近郊にある故郷の村ワイトゥヒを舞台にしたマオリ語と英語で書かれたオペラ *Waituhi: The Life of the Village* を製作し、1984 年ウェリントンで上演するほか、戯曲 *Woman Far Walking* [1] を執筆し、2004 年にパラオで開催された第 9 回 Pacific Arts Festival で好評を博した。サモア人作家アルバート・ウェンツも、戯曲 *The Songmaker's Chair* (2004) [2] を執筆している。詩人、小説家、舞台俳優、画家、ミュージシャンでもあるアピラナ・テイラー（Apirana Taylor）は、マオリ語トータル・イマージョン教育を行う幼稚園コーハンガ・レオをめぐる議論を交わした *Kohanga* (1995 年初演) [3] をはじめ、数編の戯曲を書いており、その中には、*Nga Manu Roreka* (2006 年初演) のように Taki Rua Productions による Te Reo Māori Season の上演作品としてマオリの子供たちのために書かれたマオリ語のパフォーマンスもある。このようにニュージーランドにおける先住民言語教育に、演劇も一役買っているのであるが、しかし、短編小説や児童向け絵本はマオリ語で出版されるものがあっても、演劇は、コーハンガ・レオやクラ・カウパパ・マオリを巡回する Taki Rua Productions

---

[1] Witi Ihimaera. *Woman Far Walking* (Wellington: Huia Publishers. 2000).
[2] Albert Wendt. *The Songmaker's Chair* (Wellington: Huia Publishers. 2004).
[3] Apirana Taylor. *Kohanga* (Wellington: Playmarket. 1995).

の Te Reo Maori Tour [4] の学校向けのパフォーマンスを別にして、コマーシャルな劇場で上演されるものとしては、マオリ語のみで書かれたものは少ない。会話の一部や歌の歌詞がマオリ語である場合も、戯曲のベースとなる言語は基本的に英語である。その点、2007 年にオークランド、ハミルトン、ウェリントンを巡回した Te Ao Marama Tapui のプロダクションによる *Maui: One Man Against the Gods* [5] は、劇中言語の 95%がマオリ語であるという点で例外的である。カパ・ハカ（マオリの伝統的な踊り）、モダン・ダンスとブロードウェイ・ミュージカル的旋律の混交した視覚芸術的な要素のつよいミュージカル・パフォーマンスであるこの作品は、人々によく知られたマオリ神話に基づく話であり、ほとんどのせりふと歌の歌詞はマオリ語で、英語はナレーター役の登場人物（主人公 Māui の育ての親）によって、補助的に使われるにすぎない。

第二世代の主な若手マオリ劇作家としては、ホネ・コウカ（Hone Kouka）、ブライアー・グレイス=スミス（Briar Grace-Smith）、アルバート・ベルツ（Albert Belz）などがあげられる。マオリの作家によって書かれた戯曲の中にも、英語とマオリ語以外のオセアニア言語が使用されることがある。たとえば、ホネ・コウカの *Home Fire* (1997) [6] では、姉妹が歌うマオリの歌はマオリ語とサモア語で歌われる。南太平洋諸国、とくにサモア出身の作家たちの作品も、現代ニュージーランド演劇において重要な位置を占める。そのほか、南島の鉱山で働くためにニュージーランドにやってきた中国系移民についての戯曲、ニュージーランドのインド人移民についての芝居なども上演されている。

2．ニュージーランドの南太平洋諸島移民 ——“What a crasy country!”——

ニュージーランド、サモア、フィジー、ハワイの各大学などで教鞭をとってきたサモア人作家アルバート・ウェンツは、南太平洋諸国出身の作家の中でも知名度が高い作家のひとりである。2003 年 9 月、オークランド・シアター・カンパニーによって初演され、第 1 回オークランド国際フェスティバルを飾った *The Songmaker's Chair* (2004) は、1950 年代にニュージーランドに移民したサモア人家族の物語である。初期の自伝的小説 *Sons for Return Home* (1973) のテーマを引き継ぎながら新機軸を示している。サモア語の創世神話で幕をあけ、サモア語の歌で終わるこの戯曲は、これまでのウェンツの小説とは比較にならないほど多くのサモア語の会話や歌を含む。このチャレンジングな芝居が、南太平洋諸国からの移民を多く抱えるオークランドでヒットを得たことは想像に難くない。

戯曲の中心となるテーマは、‘fusion’ である。40 年余の移民生活をふりかえる Peseola（生き続ける歌）という名の老人と妻 Malaga、サモア生まれの長男と白人ニュージーランド人の妻、サモア生まれの長女とマオリの夫、ニュージーランド生まれで作家の次男、ニュー

---

[4] Taki Rua Productions の Te Reo Maori Tour は、1995 年に始まったもので、おもに 4～12 歳の子供が対象となっている。http://www.takirua.co.nz/te-reo-maori-tour-te-kumara-reka/ を参照。

[5] Te Ao Marama Tapui Ltd.から DVD/CD-R が市販されている。

[6] Hone Kouka, *Home Fire* (Wellington: Playmarket, 1997).

ジーランド生まれの反抗児的な末娘、マオリと白人とサモア人の血をひく孫たち、数年ぶりに集ったこれらの家族が、それぞれのコンプレックスや憎しみや愛情をぶつけ合う。死を告げる祖先の神の化身 Lulu（梟）を怖れていた Peseola は、やがてその異教の神を受け入れ、長男に椅子(songmaker's chair) と称号を譲って死出の旅にでる。Peseola の若い孫姉弟がラップで家族（aiga）の歴史を語る場面からは、舞台にのせたときの興奮が伝わってくる。ニュージーランドの（とくにマオリの）若い世代のカウンター・カルチャーの粋であるラップにのせて歌われる歌には、新しい国を故郷（home）として強かに生きる南太平洋移民のパワーが感じられる。[7]

ウェンツ *The Songmaker's Chair* が、まじめな家族劇であるのに対して、オスカー・ナイトリー（Oscar Kightley）とサイモン・スモール（Simon Small）共作の *Fresh Off the Boat*（1993 年初演）[8] は、どたばた喜劇的なユーモアと笑いにあふれる悲喜劇である。ニュージーランド生まれの二人の娘をもつ病院勤めのサモア人女性 Elizabeth と職場の同僚でボーイフレンドであるヨーロッパ系ニュージーランド人の Mervyn は、サモアからニュージーランドに移住してきた Charles (Elizabeth の弟) を家に迎え入れる。はでなアロハシャツを着てレイを首にかけ、いっぱい荷物をさげて空港に現れる Charles は、いわゆる 'a real fob' (12)、'freshy' (13) とよばれる典型的なおのぼりさんである。市場でサモア出身の男から Elizabeth への手土産にもらった活けの蛸をさげてバスに乗ろうとした Charles は、"no animal on the bus." (43) と断られて、「サモアでは豚でも鶏でもバスに連れて乗れるのに、なんてへんてこな国だ！」("What a crasy country!" 44)[9]といきまく。娘たちにサモア語は一切教えず、ニュージーランドで中産階級的な生活を達成しようとする Elizabeth は、英語を満足に話せない弟をニュージーランドの生活に適合させるべくしつけようとするが、年下で居候であるにもかかわらず、サモアの古い家父長的な道徳概念から、結婚せずに男と同棲している姉の私生活を批判し、「家」をしきろうとする Charles と Elizabeth の間には諍いがたえない。姉の口利きでせっかく得た工場の仕事も飲んだくれて遅刻がちなため首になってしまう Charles は、Elizabeth、Mervyn と大喧嘩をして家を出て行く。一方、母親のいいつけにそむいて、就職活動もせずにバンドの練習をしている次女 Evotia は、このどうしようもない叔父 Uncle Charles になついており、サモア語を熱心に教えてもらっている。バス停でひとり膝を抱えてぽつんと座っている迷子の Charles の姿がラストシーンのこの戯曲は、これからこの家族がどうなっていくのかオープン・エンディングなままに幕を閉じる。

1969 年にサモアの首都アピアに生まれ、4 歳のときにニュージーランドに移住したオスカー・ナイトリーは、*Fresh Off the Boat* のほか、ニュージーランドのサモア人を登場人物とするいくつかの芝居を 1990 年代に書いている。中でも興行上の成功を収めたのは、デイヴ・

---

[7] ウェンツの *The Songmaker's Chair* に関するこの議論は、拙論「ラップで語る移民の物語」(『英語青年』150 巻 1 号, 2005, p.16.) に基づく。

[8] Oscar Kightley & Simon Small. *Fresh Off the Boat* (Wellington: The Play Press. 2005).

[9] サモア語の発音の影響で'crazy'の有声音がなまって無声音（crasy）になっている。

アームストロング（Dave Armstrong）と共作の戯曲 *Niu Sila* [10]（表題はサモア語でニュージーランドの意）である。2004 年ウェリントンでの初演で Chapman Tripp Teatre Awards を受賞し、2005 年にオークランドと再びウェリントンで、2007 年にクライストチャーチで上演され、さらに同年イギリスのケンブリッジで開催された Pacifika Styles Festival でも上演された。この戯曲は 1970 年代のオークランドに移住してきた 6 歳のサモア人移民の少年 Ioane と隣家の白人のニュージーランド人少年 Peter との 30 年間に渡る友情を描いている。

2005 年の Auckland Festival で上演された *Vula* は、前年の Pacific Arts Festival でも好評を博し、現代ニュージーランド演劇の中に南太平洋文化の要素を位置づける舞台のひとつとなっている。フィジー系ニュージーランド人のディレクターNina Nawalowalo とニュージーランド人の作曲家によるこの戯曲は、ほとんどせりふがなく、音楽と歌と踊り（パントマイム）による視覚芸術的なパフォーマンスである。南太平洋のどこかの島の水辺を想定した舞台一面に波打つ水の中で、女性たちが魚を捕まえたり、戯れたり、歌いながら踊るその所作の中に小さな日常のドラマが表現される。水の波紋と飛び散るしぶきが暗い舞台を照らす照明によってクローズアップされる。夢幻劇を見ているかのような不思議な空間をつくりだしていた。この超言語的視聴覚芸術のパフォーマンスは、フィジー語などの南太平洋諸語を知らない観衆に言語を超えて舞台体験を共有させる方法を見出している。*Vula* は、2006 年にシドニーで、2008 年にはロンドンの Barbican（The Pit）で上演されている。

3．ウィティ・イヒマエラの歴史劇

マオリ作家による戯曲で、最も歴史的な重厚性のある作品のひとつは、ウィティ・イヒマエラの *Woman Far Walking* (2000 年初演) である。ホネ・コウカの *Nga Tangata Toa* [11]、*Home Fire*、*The Prophet* [12] やブライアー・グレイス=スミスの *Purapurawhetū* [13]、*When Sun and Moon Collide* [14] などが、ある個人の死をめぐる復讐と和解といった家族劇であるのに対して、イヒマエラのこの戯曲は、マオリが辿った歴史を提示している点で重要である。1840 年 2 月 6 日、ニュージーランドの植民地化を意図するイギリスがマオリの首長たちとワイタンギ条約を結んだまさにその日に生まれたマオリ女性 Tiri Mahana（Tiriti o Waitangi Mahana）が 160 歳の誕生日に自らが歩んだ遠い道のりをふりかえる。舞台上で 160 歳の Tiri と彼女に思い出したくない過去を思い出させる分身 Tilly（30 歳代半ばのマオリ女性）が、絡み合いながら、およそ 1 世紀半の歴史を駆け抜ける。マオリの預言者 Te Kooti の一団と白人たちとの戦闘（1868 年）、1918 年のインフルエンザ大流行、フランスによる南太平洋での核実験、1981

---

[10] Dave Armstrong & Oscar Kightley, *Niu Sila* (Wellington: Playmarket, 2004). 演習問題つきの学校用教科書版も出版されている（Albany: Thomson/ New House, Nelson Price Milbrum Ltd., 2007）。

[11] Hone Kouka, *Nga Tangata Toa* (Wellington: Victoria University Press, 1994).

[12] Hone Kouka, *The Prophet* (Wellington: Huia Publishers, 2006).

[13] Briar Grace-Smith, *Purapurawhetū* (Wellington: Huia Publishers, 1999).

[14] Briar Grace-Smith, *When Sun and Moon Collide* (Wellington: Huia Publishers, 2007).

年の Springbok Tour の抗議[15]の乱闘場面が、同年、ほぼ同時期のダイアナ妃とチャールズ皇太子の婚礼セレモニーでマオリ歌手キリ・テ・カナワが歌ったヘンデルのアリア 'Let The Bright Seraphim' をバックに繰り広げられる。現在に近づくにつれて老いた Tiri の脳裏で、過去の戦闘と現在の場面が重なる。Tiri のお気にいりの末裔である少女 Jessica が、息をひきとる 160 歳の Tiri との別離の悲しみから立ち上がり、Tiri から教わった女性のハカ（戦闘の踊り）を踊りはじめるところで戯曲は幕を閉じる。

4．若手マオリ作家の戯曲（ホネ・コウカとブライアー・グレイス=スミス）

ホネ・コウカは *Mauri Tu*（1991 年初演）[16]、*Nga Tangata Toa*（1994 年初演）をはじめ、11 の戯曲を執筆している。*Waiora*（1996 年初演）[17]、*Home Fire*（1997 年初演）、*The Prophet*（2004 年初演）は、いずれも故郷の村を出た登場人物たちのなんらかの帰還をめぐる物語である。*Waiora* は、1996 年の国際芸術祭で、イギリスのブライトンでも上演された。*Waiora* は南島の都市に移住したマオリの家族が思春期の少女 Rongo の自殺未遂をきっかけに故郷ワイオラに戻る決意をするという物語[18]、*Home Fire* は、故郷の村に残った姉 Emare のもとに妹 Tia が帰還し、長女 Ahi の死をめぐって二人の姉妹が和解をする話である。Emare が 12 歳、Tia が 9 歳のとき、長女 Ahi が恋人との逢引に使っていたカヌーを母親の指図で隠した Emare は、対岸へ泳いで渡ろうとした姉 Ahi をはからずも溺死させてしまう。Emare がカヌーを隠すのを目撃した Tia は、Emare が嫉妬のためにとった行動と思い、Ahi を死なせた姉を許せない。故郷を去ったのち、長年の年月を経て帰還した Tia は、母親と Emare が自責の念から自らの身体を傷つけていたことを知り、病気で息をひきとる間際の Emare と和解する。表題の *Home Fire* は Emare が亡くなった長女のためにたくかがり火である。*Waiora* がマオリ人口の都市化と白人社会への同化のひずみといった社会的な問題を扱っているのに対して、*Home Fire* はより普遍的な家族の死をめぐる贖罪の物語である。一方、最新作の *The Prophet* は、現代のマオリの若者たちの等身大の姿を描写している。*The Prophet* は、戯曲 *Waiora* の表題にもなった北島東海岸の架空の村ワイオラが舞台である。一年前に亡くなった（自殺した）いとこ Joshua の忌明けの儀式（墓石の覆いをとる 'hura kōhatu' という儀式）のために町からワイオラに帰郷した the Dilworth whānau の若者たちと Joshua の母親 Kay を登場人物とする。Radio Ngāti Tawata という部族のコミュニティ・ラジオの DJ Ngutu の声が戯曲のナレーター代わりに、物語の進行を語る役割を果たしているのが面白い。

劇作家、短編小説作家、女優でもあるブライアー・グレイス=スミスは、処女作 *Ngā Pou*

---

[15]白人選手だけによって構成された南アフリカ共和国のラグビーチーム Sprinvok のニュージーランド巡回試合に対してマオリが大規模なデモ運動を行い、警棒とヘルメットで武装した警察隊と衝突して、多数の負傷者が出た事件。

[16] Hone Kouka. *Mauri Tu* (Wellington: Aoraki Press. 1992).

[17] Hone Kouka. *Waiora* (Wellington: Huia Publishers. 1997).

[18] *Waiora* については拙論「ニュージーランドにおける先住民文化と医療——Hauora Māori——」『ポストコロニアル・フォーメーションズⅡ』（大阪大学大学院言語文化研究科、2007）pp.17-30 で詳しく論じている。

Wāhine（1995 年初演）[19]をはじめ、*Waitapu*（1996 年初演）[20]、*Purapurawhetū*（1997 年初演）、*Haruru Mai*（2000 年初演）、*When Sun and Moon Collide*（2000 年初演）、*Potiki's Memory of Stone*（2003 年初演）など 9 作の戯曲と映画 *The Strength of Water* のスクリプトを書いている。*Waitapu* は、カナダの先住民演劇グループである The Native Earth Performing Arts のプロデュースで、Hé Ara Hou Māori Theatre Company というマオリ劇団の団員をキャストとしてトロントで上演されてもいる。この戯曲のテーマは、部族の先祖の歴史の回想・回復である。部族の先祖 Te Mana Kaha が兄の Rongopai を殺めてランガティラ（部族の長）になったという人々に忘れ去られた過去の歴史を、故郷の村 Waitapu に帰った彫刻家の Matiu は、亡くなった祖父の霊と語らいながら、記憶からよみがえらせる。Matiu は Rongopai の像を彫って Te Mana Kaha の像とともに集会場の建物に据えることによって、Te Mana Kaha の犯した罪をあがない、妻 Jaki の身にふりかかった先祖の呪詛（息子 Rongopai を殺された母親 Hine Te Awhiowhio の呪い）をとく。*Waitapu* には、伝統的なマオリの慣習を守るべきかという議論やマオリの先祖の伝説に関係する超自然的な要素などが絡んでいる。

Purapurawhetū もまた、地方のマオリの共同体をめぐる話である。マラエの新しい集会所の壁を飾る装飾パネルをつくるマオリの青年 Tyler、町から来たばかりでマオリ語も織物の技術もわからず仲間にいれてもらえないマオリの少女 Ramari、毎日海辺に貝を探しにいくといっては溺死した我が子の遺体をさがし続けている耄碌した老人 Koro Hohepa、土地の相続がねらいで故郷に戻ってきた腹黒い息子 Matawera、赤ん坊を Matawera に海に沈めて殺されたのち、マラエに火を放って夫 Hohepa のもとを去った Kui（Aggie Rose）らが再会し、亡くなった赤ん坊を Awatea（「夜明け」の意）と名づけてその魂を鎮め、Hohepa の土地を養子（で孤児）の Tyler にゆずる。昔、Hohepa と Kui（Aggie Rose）がそうしたように、Tyler と Ramari の二人が新しい装飾パネルのパターン 'purapurawhetū'（「あまたの星」の意）を完成するところで戯曲は幕を閉じる。1997 年の Best New Zealand Play に選ばれたこの戯曲は、アイルランド、オーストラリア、カナダ、ギリシャでも上演されている。

それに対して、グレイス=スミスの *When Sun and Moon Collide*（2000 年初演）は、月が人間のライフ・サイクルに大きな影響を与えると信じる Declan が祖父から教わったマオリの陰暦カレンダーのメモをしょっちゅう参照するのをのぞいては、あまり劇中にマオリ的要素はない。ある田舎町のティー・ルームを経営する Isaac のもとにやってくる客と友人たち（刑務所から出てきたマオリの Declan、婦人警官の Travis、拒食症の若い女性 Francie）の間で、ある殺人事件と Francie の兄 Vic（本当は兄ではなく Francie のもとの恋人である）による虐待の真相が明らかになり、無実の罪をかぶせられた Declan の容疑が晴れるという物語である。ブライアー・グレイス=スミスの従来の作品とは毛色の違ったサスペンス劇であるが、片田舎での殺人事件というあまり現実味のない物語（戯曲のタイトルはその現実味のなさを意図しているのかもしれないが）である。

---

[19] Briar Grace-Smith, *Ngā Pou Wāhine* (Wellington: Huia Publishers, 1997).

[20] Briar Grace-Smith, *Waitapu* (Wellington: Playmarket, 1996).

5．マオリタンガ（マオリらしさ）からコスモポリタンへ

これまで紹介したホネ・コウカやブライアー・グレイス=スミスの初期の作品がそうであるように、1990 年代のマオリの戯曲はしばしばマオリタンガ（言語を含むマオリのアイデンティティ、マオリらしさ）の保持といった社会的テーマを扱っていた。しかし、これらの若い作家たちによる最近の戯曲には、マオリタンガのテーマから離れる傾向がある。ホネ・コウカの *The Prophet* に登場するマオリの若者たちは、マオリであることについて悩みはしない。また、グレイス=スミスの *When Sun and Moon Collide* は、マオリのアイデンティティや社会問題とは無関係な単なるサスペンス劇である。

切れのよい文章と構成の緻密さ、犯罪、同性愛、統合失調症といったテーマで異彩を放つ若手マオリ劇作家アルバート・ベルツ（Albert Belz）は、コウカやグレイス=スミスよりもあとに演劇界に登場した作家であるが、このベルツの作品にも、マオリタンガからコスモポリタンへというテーマの移行がみられる。2001 年初演の *Te Maunga* [21] をもってプロの劇作家としての活動を開始したベルツは、*Awhi Tapu*（2003 年初演）[22]、*Yours Truly*（2006 年初演）[23]、*Te Karakia*（2008 年初演）、*Whero's New Net*（2008 年初演）[24] のほか、イヒマエラの映画のスクリプトも書いている。ベルツの最初の戯曲 *Te Maunga* は、マオリの父親とパケハの母親の間に生まれた二人の兄弟の物語であり、まさにマオリのアイデンティティの問題を扱うものである。John が 9 歳、Piripi が 7 歳のとき母親は John をつれて夫のもとを去った。それ以来、都市の白人社会で成人した John と、故郷に残り彫刻家となった Piripi は、二つの別の世界で生きる。Piripi は母親に見捨てられたという傷をいまだに負っている。およそ 20 年後、John は父親の死を知らせるため Piripi に再会する。次の引用は Piripi が John に、自分たちは 3 本の足をもって生まれた奇形児のようなもので、おまえは母親について父親のもとを去ったとき、マオリの足を切り落としたのだという場面である。

> Piripi—Always fascinated me how well you've managed to walk on your pakeha leg.
>
> John—Me?
>
> Pipiri—You.
>
> John—Pakeha leg?
>
> Piripi—The two of us. We grew up with three legs.
>
> John—Very modest of you.
>
> Piripi—Three worlds bro. Our maori leg, our pakeha leg, and our something in between leg, hanging there impotently.
>
> . . . . . .
>
> John—She did. . . . . what she did.

---

[21] Albert Belz, *Te Maunga* (Wellington: Playmarket, 1999).
[22] Albert Belz, *Awhi Tapu* (Wellington: The Play Press, 2006).
[23] Albert Belz, *Yours Truly* (Wellington: Playmarket, 2005).
[24] Albert Belz, *Whero's New Net* (Wellington: Playmarket, 2008).

Piripi—She didn't have too. [*sic.*]

John—Well she did.

Piripi—And ever since, you just severed your maori leg.

John—wasn't much use for it in Mama's world.

Piripi—Your world.

John—Maybe it was better than trying to stumble upon it like a leper.

Piripi—Maybe that's it. Maybe the maori leg just fell off. (Act 1 Scene 4)

日に300頭の羊を刈る "a gun sharer" (22)とかつてよばれた父親は、落馬事故で背中を傷め、酒に酔っては妻に暴力をふるった。そんな父親が痛む背中に無理をして、一度、John と Piripi をヒクランギ山の頂上につれていって一緒に日の出を仰いだことがあった。父親の葬儀に向かう John とその妻、Piripi の 3 人は再びヒクランギ山の山頂に登り、2000 年元旦の夜明けを迎える。John のアイルランド系イギリス人の妻 Liz は、薬物中毒で親権を失った経験があり、今も幼い息子を引き取ることを許されない。この Liz が媒体となって、John と Piripi の和解が、またこの兄弟と両親との精神的な和解が成し遂げられる。

一方、ベルツの *Yours Truly* と *Whero's New Net* は、ロンドンが舞台である。*Yours Truly* は、ベルツの戯曲の中で唯一ニュージーランドともマオリとも関係のないサスペンス劇である。キャムデン・タウンの娼婦の一連の絵で知られ、ヴァージニア・ウルフなどのモダニズム作家の後期のリアリズム小説にも影響を与えたといわれるヴィクトリア朝の画家ウォルター・シカート（Walter Sickert）らを主人公とするこの戯曲は、5 人の娼婦が連続殺害されたいわゆる「切り裂きジャック事件」に関する多数の説の中で、王室共謀説として一時流布した話を下敷きに、独自の登場人物のキャラクターを創造して書き換えたものである。王室共謀説とは、切り裂きジャック事件は、ヴィクトリア女王の孫であるクラレンス公（the Duku of Clarence and Avondale）アルバート・ヴィクター（ベルツの劇中では Albert Edward Victor）が起こした女性関係の不始末を片付けるためにヴィクトリア女王が王室のお抱え外科医でフリーメーソン会員の Sir William Gull に命じて口封じをしたものであるという説で、画家のウォルター・シカートもかかわっていたとされた。最後の犠牲者となった Mary Kelly（ベルツの劇中では Marie Kelly）が顔も容姿もわからないほど切り裂かれていたという点をうまく利用して、ベルツは話を少し変形させ、殺されたのは身代わりの女性であったことにしている。また、梅毒が原因の脳軟化症とも同性愛者とも噂されたクラレンス公（Eddy）は、街の菓子屋で働く美しい娘 Annie Crook を前にしてどもる純情な青年としてベルツの戯曲の最初の場面では描かれている。Gull 医師たちによって、Annie は麻酔をかけて頭部を切開され、左脳を切除して、「狂人」として病院に監禁される。劇中で Gull が医学生に行う講義（前頭葉の損傷と凶暴犯罪の関係について）には、20 世紀の前頭葉切除手術（ロボトミー）などをめぐる精神外科の議論との類似性が見られ、時代錯誤的ながら、この戯曲に一種の現代性をもたらしている。

Sickert が Gull に教わったゲーム（より強いものの名をあげていくゲーム）で Marie をうち負かそうとするとき、そのニヒリスティックなデッド・エンドの問答を見事に切り抜ける Marie は、この戯曲の中で唯一救いの光を感じさせる人物である。結局のところ、Marie は繰り返される殺戮劇から逃れることになる。

Sickert: I am a fly with a thousand eyes…defeat me.
Marie: I'm…a mantis, I slice you in two.
Sickert: I am the boy that squashes your bug.
Marie: I'm the father who beats the child.
Sickert: I'm the king who lops off his head.
Marie: I am God to whom the King answers.
Sickert: The devil who defies your God.
Marie: I am faith.
Sickert: Desire.
Marie: I am love.
Sickert: I am doubt.
Maire: I am conviction.
Sickert: I am the end of time, the pitch black nothingness.
Marie: I am…I am…. I am the first thought…the resurrection…light…I am hope.
Pause…Surprised, Sickert is unable to continue. (Act 2 Scene 24)

Sickert は愛人 Marie Kelly を彼女の同性愛の友人 Maria Harvey を身代わりの犠牲にすることでフランスに逃れさせる。

このサスペンス劇をニュージーランド・マオリの作家が書くとき、この筋立てはイギリス人作家が書く場合とちがった意味をもってくる。つまり、それは大英帝国の残酷さを物語る劇となるのであり、殺害され切り裂かれて放置される売春婦の遺体は、帝国によって搾取された植民地の姿でもある。Marie が逃れたのは、支配者と被支配者の間で繰り返される帝国の殺戮劇である。

イギリスの劇作家バーナード・ポメランス（Bernard Pomerance）の戯曲 *The Elephant Man*（1977 初演）[25] の外科医 Treves は、ヴィクトリア朝の「正常性」の規範に則するように人々を「刈り込み、刈り入れ、枝を切り取り」("pruned, cropped, pollarded") 思考できなくさせてしまう（"stupefied"）「帝国の優秀な庭師」("an awfully good gardener") として働いてきたその所業を患者 Merick に責められるとき、「それではまるで私が切り裂きジャックのようでは

[25] Bernard Pomerance, *The Elephant Man* (New York: Grove Press, 1979). この戯曲の詳しい議論は拙論「反復の力学」『言葉と反復』(大阪大学大学院言語文化研究科、2002) pp.25-36 参照。

ないか」("As you put it. Make me sound like Jack the, Jack the Ripper." 第 16 場）というが、「帝国の優秀な庭師」である Treves 医師と、社会的弱者である売春婦の身体を切り裂くジャックの所業は、本質的に変わらないことを示唆している。つまり、切り裂きジャックは、帝国の暴力のメタファーなのである。

ベルツの最新作 *Whero's New Net* は、ロンドン在住のマオリが登場人物である。ホネ・コウカの *Waiora* が、故郷の共同体から離れて都市で生活するマオリのニュージーランド国内におけるディアスポラ状況描いていたのに対して、ベルツはメトロポリタン・ロンドンにおけるマオリを閉塞した状況の中で描いている。この戯曲は、統合失調症のマオリの男女の物語だが、そのことは最初から明らかにはわからない。戯曲の幕開けに、舞台でボーカルを歌う女性歌手 Red とギターを伴奏するパートナーの女性 Whero（マオリ語で「赤」）が、分身同士であることは、その名前からも、Red が歌う歌の内容（ある友達についての歌）からも見当がつくが、Whero のマネージャーで友人でもある Dermot とその男友達 Tupo もまた同一人物の分身であるらしいことは、戯曲の終り近くになって明らかになる。ある日、ニュージーランドのギズボーンから来た Petera Mahana と名のる青年が Whero を訪ねてくる。Petera は Whero の異母兄であることを告げ、父親の日記を Whero に渡す。Petera は Red をロンドンに残して、Whero をニュージーランドに連れ帰ろうとするが、Whero はかたくなに拒む。日記に記された父親 Kotare と（Petera の）母親 Anahera の物語が、舞台で劇中劇のように展開される。Kotare は会社を欠勤しては、下の階の部屋に住む 5 人の若者たちを訪ねて、そのようすを Anahera に話すが、下の階には誰も住んでいない。Kotare の幻覚はひどくなり狂気に陥っていく。この戯曲はその表題が示すように、ウィティ・イヒマエラの初期の短編集 *The New Net Goes Fishing*（1977）[26] の 中の"The Kids Downstairs" などいくつかの短編小説を下敷きにしたものであるが、舞台で劇中劇として展開される狂気の父親 Kotare の物語は、実は日記ではなく、Whero がイヒマエラの短編小説集を空想で書き換えた物語であることが最後にわかる。Dermot は統合失調症の Whero の特殊な才能を生かそうと薬を飲むのをやめさせたため、幻覚がひどくなったのだ。Dermot は Whero に再び薬を飲ませようとするが、結局 Whero は Red と別れることはできず、分身の Red を連れたまま、Dermot（とその分身の Tupo）と一緒にニュージーランドに飛び立つところで幕を閉じる。二組の同性の分身たちの関係には、*Yours Truly* にも少し出てくる同性愛のテーマも重ねられている。

6．おわりに

おもに先住民マオリ作家と南太平洋出身の作家による現代ニュージーランド演劇の諸相を概観し、紹介したが、本稿は、今後、異なる機会に詳しく論じるための見取り図を示す研究ノート（備忘録）にすぎない。オーストラリアのアボリジニーの演劇、アジア系作家の演劇、そのほか南太平洋諸国の演劇との関連の中で、さらに別の機会に個々の作品を詳しく論じたい。

---

[26] Witi Ihimaera. *The New Net Goes Fishing* (Auckland: Heinemann. 1977).